

Z108a 野尻抱影の星の和名収集帳調査の現状と課題：長野県天文文化の再発見を例として

渡辺真由子（茅野市八ヶ岳総合博物館）、長野県天文文化研究会メンバー、「市民科学」プロジェクト参加者ほか

星の名前や呼び方は、天文と文化を結び付ける重要な要素であり、一般市民にとっては星空や宇宙を身近に感じ、認識を深めるきっかけとなるものである。冥王星の和名提案者として知られる野尻抱影（1885-1977）は、日本各地に残る星の和名を集成し、『日本の星』（研究社,1936）で約400種、『星の方言集』（中央公論社,1957）で約700種、『日本星名辞典』（東京堂出版,1973）で約900種を整理した。これは各地の天文愛好家の協力を得て行われており、約100年前に行われた市民科学的活動の先駆けと言える。本発表では、野尻の調査・研究の端緒となった長野県諏訪地方の「イッシューボシ（すぼる）」、「ツリガネボシ（ヒヤデス星団）」を知らせる手紙をはじめとする、彼のもとに届いた星の和名報告の書簡等をまとめた「収集帳」の調査状況を報告する。「収集帳」は、（1）日本の星投稿集、（2）地域別星名集の2冊があり、それぞれの特徴と傾向について述べる。さらに、資料の散逸や記述の断片性、デジタルアーカイブ化における課題を提示し、星の和名再考と地域天文文化の再発見に資する一次資料の可能性を議論したい。